

に使用され、多数のスプールが遺棄されている。④彫刻刀は、骨角、皮を加工したと推定される使用痕を遺すものが主である。⑤原石・石核の出土は少なく、完成に近い石器が多く、石器生産に比して、石器の使用・廃棄が盛んである。⑦出土炭化材の同定資料81件のうち、キハダが49点（60.5%）確認され、この樹種が盛んに持ち込まれ、使用されたことがうかがえる。⑧オニグルミの炭化内果皮が多数出土し、秋から冬季の植物資源の利用が確認される。また、⑨深い長楕円形土壙01については細石刃が比較的多く出土し、彫刻刀の出土量が少なく、焼土遺構とは異なり、貯蔵穴である可能性が強いと考えられる。

このように荒屋遺跡は断続的にしても繰り返し狩猟・漁労・植物採集活動の拠点となり、多様な機能の施設が繰り返し営まれ、膨大な量の細石刃と彫刻刀などの石器群が遺された後期旧石器時代終末期の生活遺跡である。

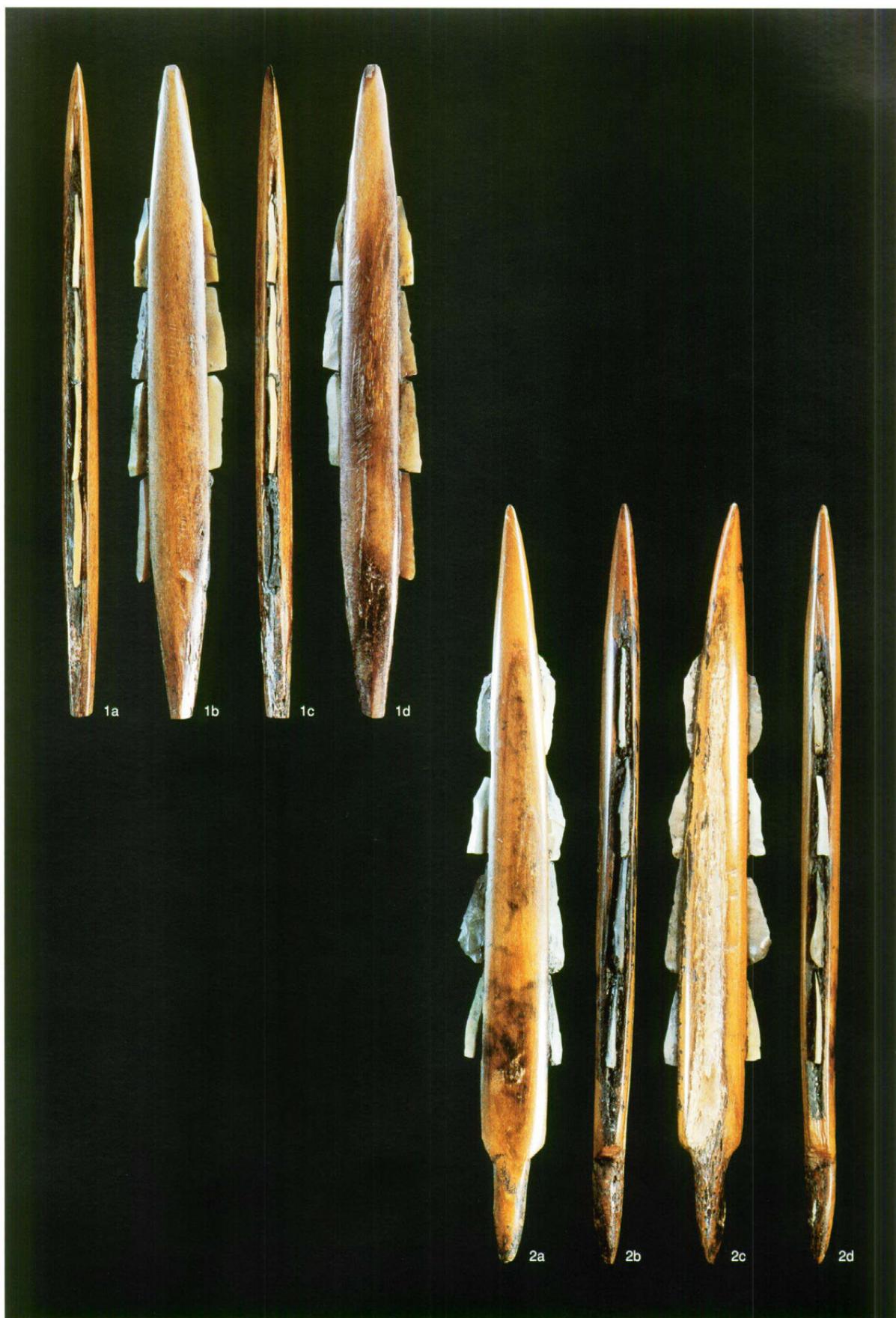
荒屋遺跡の年代については、堅穴住居居状遺構の4g層出土炭化物（13,700年±80年BP.）、焼土土壙6号の9層出土炭化物（14,100±100年BP.）、焼土土壙14号の4p層出土炭化物（14,200±110年BP.）、土壙01最下層の埋土13層出土炭化物（14,150±110年）をAMS炭素14年代測定法によって測定した。その結果、遺構の変遷とは対応しない問題点もあるが、これらの遺構群は、13,700年から14,200年BP.の年代のばらつきがあり、およそ14,000年前に営まれたものと推定される。

第3節 細石刃の装着法について

細石刃は鹿角製または骨製の軸に並べて嵌めこんで用いられたということはヨーロッパの本を読んで知っていたのだが、はたしてどのような軸に、どのようにして着装されたのかという疑問を芹沢は久しく抱いていた。しかし、その疑問はあっけなくも氷解することになった。

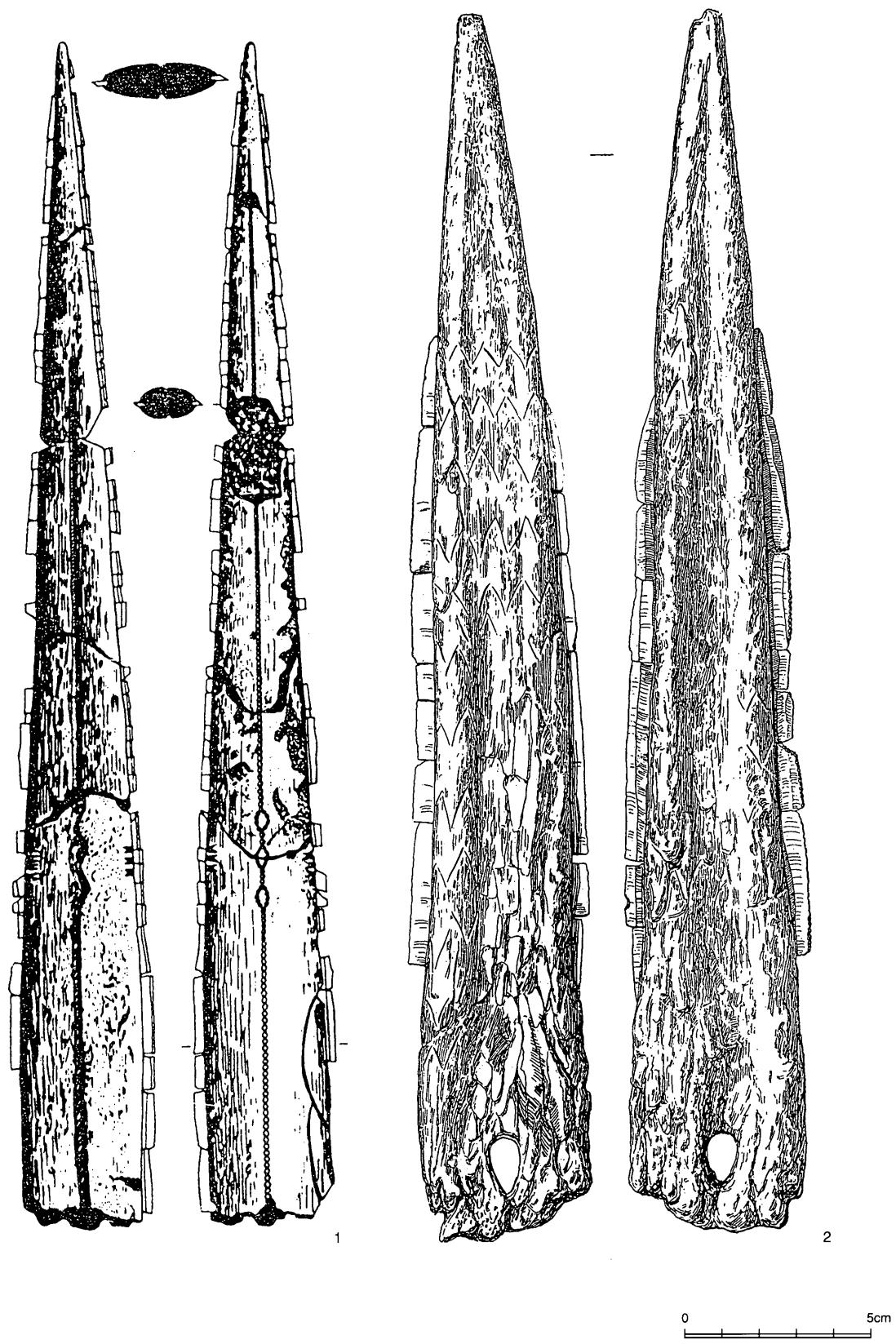
1968年、東京と京都で開催された第8回民族学・人類学国際会議の会場で、筆者はデンマーク国立博物館のヘルゲ・ラーセン博士にお会いした。博士は、デンマークのマグレモーゼ遺跡から出土した資料を持参されており、それらを日本のどこかの研究機関に寄贈したいという考えを持たれていた。そこで筆者は、会議終了後に是非仙台の東北大学へお寄り願いたい旨を伝えておいた。9月17日、ラーセン博士は仙台へお見えになった。東北大学の研究室では、とくに日本の細石器に興味を抱いたらしく、荒屋・矢出川・福井などの資料を熱心に観察されていた。その後で博士は、トランシェなどを含むマグレモーゼ出土の一括石器資料を研究室へ寄贈されたのであったが、1点だけ所持されていた細石刃嵌入の鹿角製鉢先は、寄贈できないのでこのまま持ち帰るのだと言われた。その鉢先は長さ23.5cm、最大幅1.0cmの細身であり、軸の両側には細く深い溝が彫りこんでいた。細石刃は鉢先の両側に嵌入されているのだが、右側には背面を見せるように並べられ、左側にはその反対に腹面を見せているのであった。さらに又、溝の中に挿入されるのは細石刃の先端部であり、したがって溝の外には打面とバルブのある基部が突き出ることになる。このような事実は、筆者が全く予想もしていなかったことであり、強烈な印象を受けたのであった。

第7.10図はマグレモーゼ出土の細石刃嵌入鉢先である。1は片側に細石刃の背面を、他の側には腹面を見せるようにして嵌入してある。これに反して2は左右に同じ背面あるいは腹面が見えるように嵌入してある。軸はおそらくアカシカの鹿角か、あるいは反芻動物（オーロックス？）の橈骨であり、側溝に詰められている黒いタールはおそらくカバノキを乾留した木タールであろう、というのが松井章の考え方である。



第7.10図 細石刃を嵌入した鹿角製鈍先。デンマーク・マグレモーゼ出土（実物大）

Fig.7.10. Antler projectile heads inset with microblades from Maglemose, Denmark.



第7.11図 細石刀嵌入の骨製剣

1. チェルノ・アジョーリエ (西シベリア) 出土 (Gening and Petrin 1985)

2. オレンニ島 (ヨーロッパ・ロシア) 100号墓出土 (Gurina, N.N. 1956)

Fig.7.11. Bone swords inset with microblades from Chernoozerje and Olenii island, Russia.

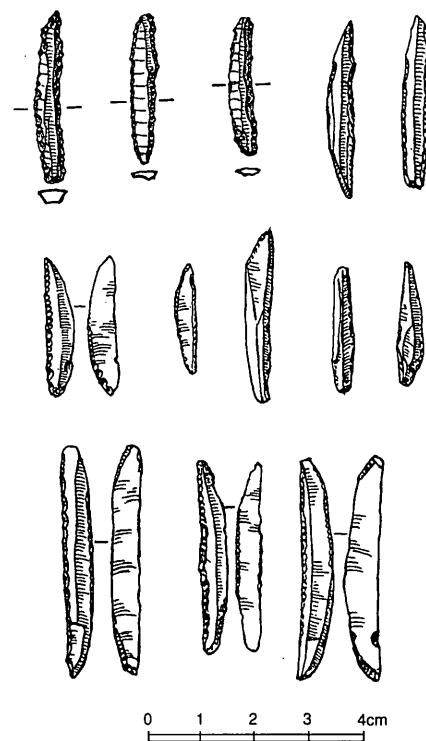
荒屋の細石刃は、打面を上に置いて見たとき、背面右側辺の上端から下端まで細かい剥離痕が連続し、腹面は先端部にだけ部分的に剥離が加えられている。何のためにこのような加工が施されたのか、また軸の溝に細石刃を嵌めこむ時には左右のどちら側を外に出したのか、という問題がある。着装例の多い北欧中石器時代の資料を見ると、軸の外側に出ている細石刃の側辺には、規則的な細かい剥離痕が見られるようである。筆者の考えでは、細かい剥離痕の見られぬ側辺を溝の中に埋めこみ、加工のある方の側辺および打面の部分を外側に突出させたのではないかと思われる。しかし第5章第2節に鹿又が述べているように、細石刃のボリッシュは細かい剥離痕のある側辺にも、また剥離痕のない側辺にも認められるので、どちらの側辺を溝に嵌入させたのかについては、まだ断定することができない。

なお、荒屋の細石刃と同じような剥離痕をもつ資料は、ヨーロッパロシアのコステンキIV遺跡から発掘されている（Rogachev A. N. 1955）。第7.12図に示すのがそれであるが、荒屋と少し違うところは、打面部分までも加工によって尖らされたものも含まれていることであろう。コステンキIVの細石刃については次のように説明されている。

「ほとんどすべての細石刃は、多かれ少なかれ縁辺の一つを全部明瞭な刃潰し状の加工が覆うが、時には尖った最上端だけが加工されないで残される。基部もしくはバルブの端に近いところでは、二次加工は、よりはつきりしていてより急角度である。反対側の縁辺では、基部のところが腹面もしくは背面から、刃潰し状の加工により小部分が取り去られていて、このとき、バルブのある縁辺では鈍い尖頭部のようなものが観察されるものの、錐状のものでは、この末端は、まったく加工がされず、その場合にはいつも素材打面の細い部分として残される。対辺の他の部分は完全に二次加工が欠けているか、あるいは小さな剥離が全縁辺にあるもの、または一部に施されているものである。」（梶原洋訳）。

このような細石刃は、ヨーロッパロシアだけでなく、ドナウ河に沿って西方に伸び、フランス西南部あたりまで分布しているようである（Demars P. Y., Laurent P. 2000）。

旧石器時代の細石刃装着例は極めて稀であるが、西シベリアのチェルノアジョーリエII遺跡出土の短剣は有名である（第7.11図1）。長さ38.7cm、最大幅4.25cm、片側に28個、他側に45個の細石刃が嵌入されているという（木村 1997）。報告書の図を見ると、細石刃は軸と平行に挿しこまれており、北欧中石器の場合とは異なっている。また、本文中の実測図では判然としないが、表紙の図を拡大してみると、軸の両側の細石刃は、片側には背面を、反対側には腹面を出すように、それぞれ嵌入されており、木村（同前）もそのような観察を述べている。また、ヨーロッパロシアのオレンニ島の100号墓からは、チェルノアジョーリエ出土品と酷似した中石器時代の骨製剣が出土している（第7.11図2）。図に明らかなように、この場合には左右の細石刃の列は同じ面を見せるよ



第7.12図 ドン河流域コステンキIV遺跡出土細石刃（Rogachev A.N.1955）

Fig.7.12. Microblades from Kostenki IV, Russia.

うに嵌入されている。したがって嵌入の方法としては、左右に異った面を見せる場合と、同じ面を見せる場合があったといえるであろう (Gening, V. F., Petrin V. T. 1985)。

第4節 荒屋型彫刻刀の分布－大陸と日本－

1. 日本

第1次発掘の直後に発表した予報 (芹沢 1959) の中では、日本列島における荒屋型彫刻刀の分布は北海道に5カ所、本州に1カ所の計6カ所にすぎなかった。しかし44年後の現在では、北海道に51カ所 (第7.13図)、本州に47カ所 (第7.14図)、計98カ所におよんでいる。とくに北海道に分布の濃密な中心があり、西南日本にはほとんど及んでいないことが明白となっている。

荒屋型彫刻刀の出土地

a. 北海道

1 浅茅野	猿払村	23 みどり 1	美幌町
2 豊別 5	稚内市	24 上似平・上似平 2	帯広市
3 モサンル	下川町	25 落合	帯広市
4 日進 2	名寄市	26 空港南 B	帯広市
5 札滑	西興部村	27 空港南 A	帯広市
6 タチカルシュナイ A・C	遠軽町	28 大空	帯広市
7 ホロカ沢 (遠間地点)	白滝村	29 晓	帯広市
(7~11は白滝遺跡群)		30 札内 N	幕別町
8 服部台 2	白滝村	31 居辺 17	上士幌町
9 白滝 37	白滝村	32 東麓郷 1	富良野市
10 白滝 32	白滝村	33 嵐山 2	鷹栖町
11 白滝 4	白滝村	34 メボシ 2	千歳市
12 置戸安住	置戸町	35 祝梅三角山上層	千歳市
13 増田	置戸町	36 丸子山	千歳市
14 吉田	置戸町	37 オサツ 16	千歳市
15 緑丘	訓子府町	38 柏台 1	千歳市
16 吉井沢 B	北見市	39 材木沢	赤井川村
17 中本	北見市	40 曲川	赤井川村
18 北進	北見市	41 都	赤井川村
19 北上台地	北見市	42 峰下	俱知安町
20 常川	常呂町	43 狩太	俱知安町
21 広郷・広郷 8	北見市	44 立川	蘭越町
22 元町 3	美幌町	45 オバルベツ 2	長万部町